関東最南端の北方系細石刃石器群

—君津市向郷菩提遺跡と袖ケ浦市東上泉遺跡出土資料の再評価—

橋　本　勝　雄

1　はじめに

本稿で取り上げる君津市向郷菩提遺跡と袖ケ浦市東上泉遺跡は，それぞれ平成15年度と平成13年度に，当財団で発掘調査が行われ，すでに報告書は刊行されている（石川2007・倉内2005）。

両遺跡では，関東地方では希少価値の高い北方系細石刃石器群（以下「北方系」という。）が出土しているが，残念ながらこれまで学界では，ほとんど顧みられることがなかった。

かかる状況を受けて，小論では当該資料の位置づけと再評価を行う。

2　資料の再検討

（1）向郷菩提遺跡（第１図）

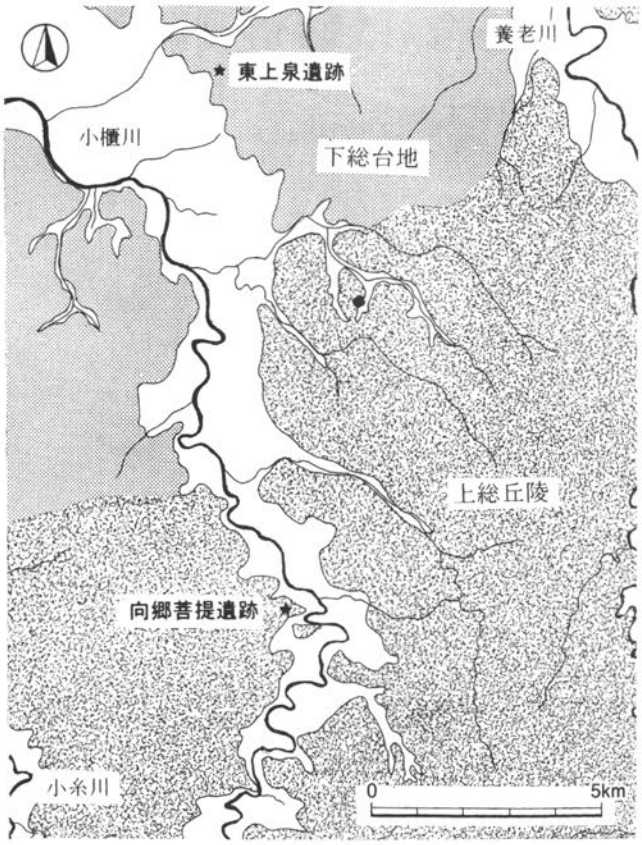
遺跡は，上総丘陵のほぼ中央部に位置し，小櫃川中流域左岸の標高58mの河岸段丘上に立地する。

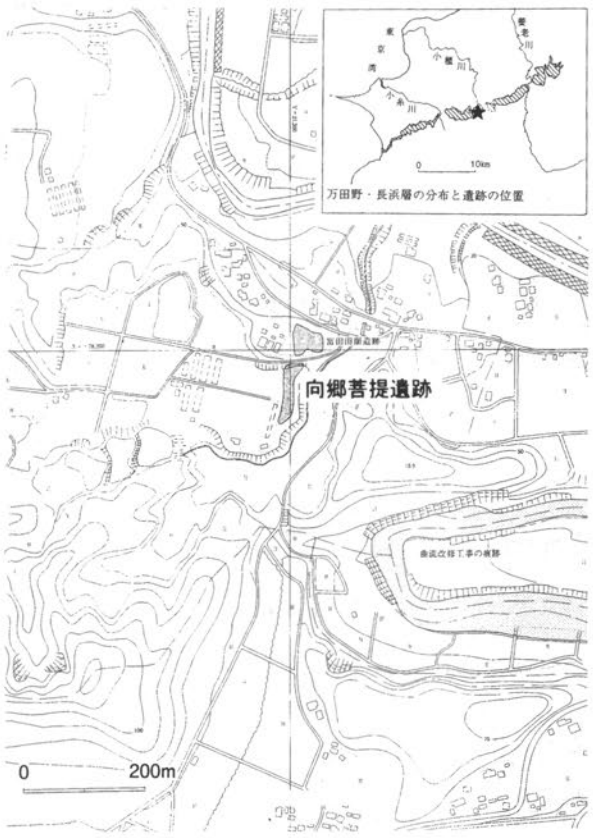
三方を小櫃川，西側を畑地のため削平されており，周辺の地形はあまり旧状をとどめていない。

この付近では、旧石器時代の遺跡は、これまで発見されておらず、旧石器時代の資料に乏しい千葉県南部（上総丘陵）の地域性を考慮すれば貴重な遺跡といえる。

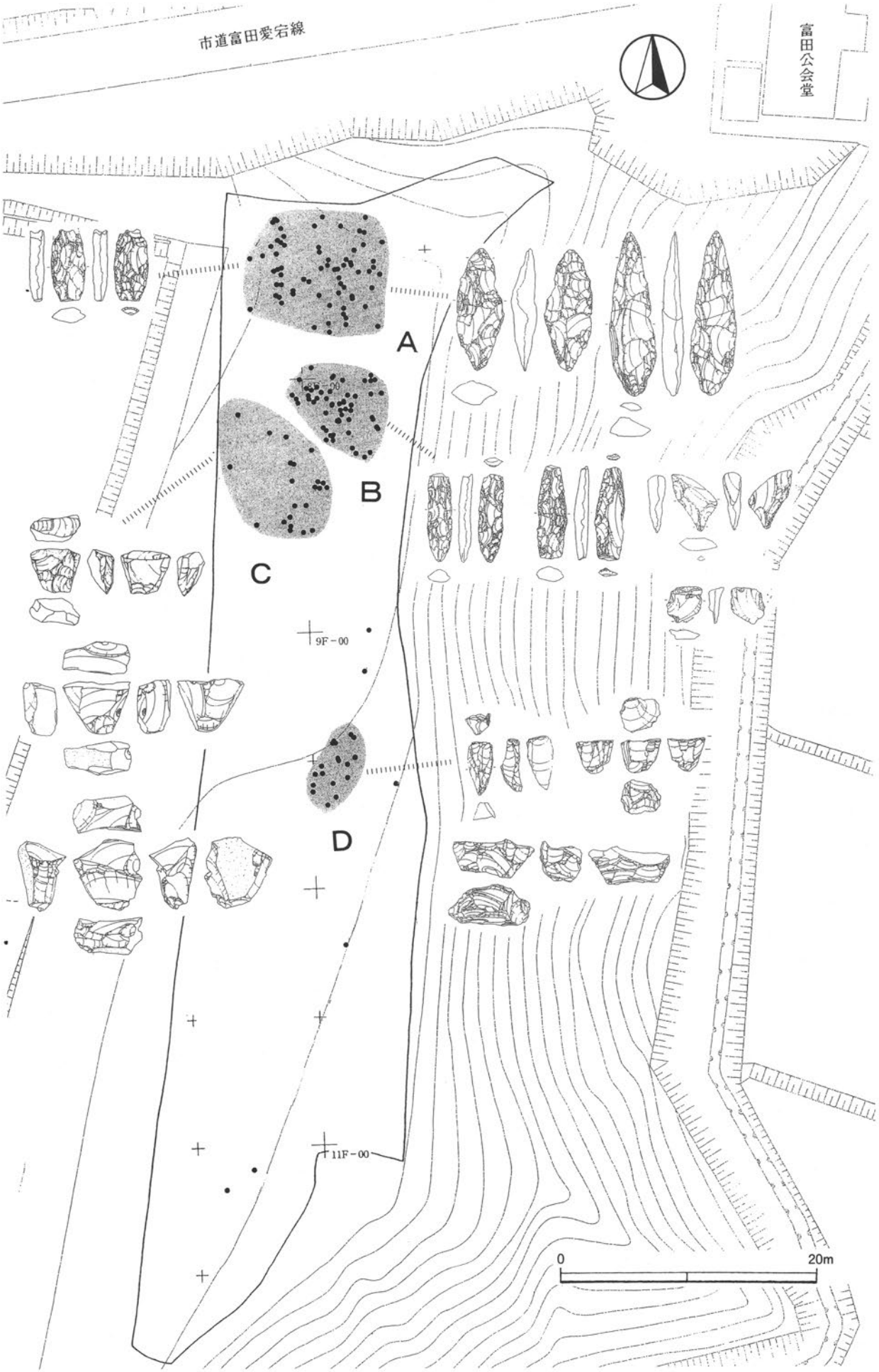
出土層位はローム層に至る漸移層で、同一層準からは遺物集中地点が４か所検出されている（第２図）。

北側の集中部２か所（Ａ・Ｂ）では，尖頭器やその未成品をはじめとして，石斧，削器，石錐，礫器が，南側の集中部２か所（Ｃ・Ｄ）では主として細石刃石器群が出土している。報文では，両者の同時性に言及しているが，明確な断定は避けている。

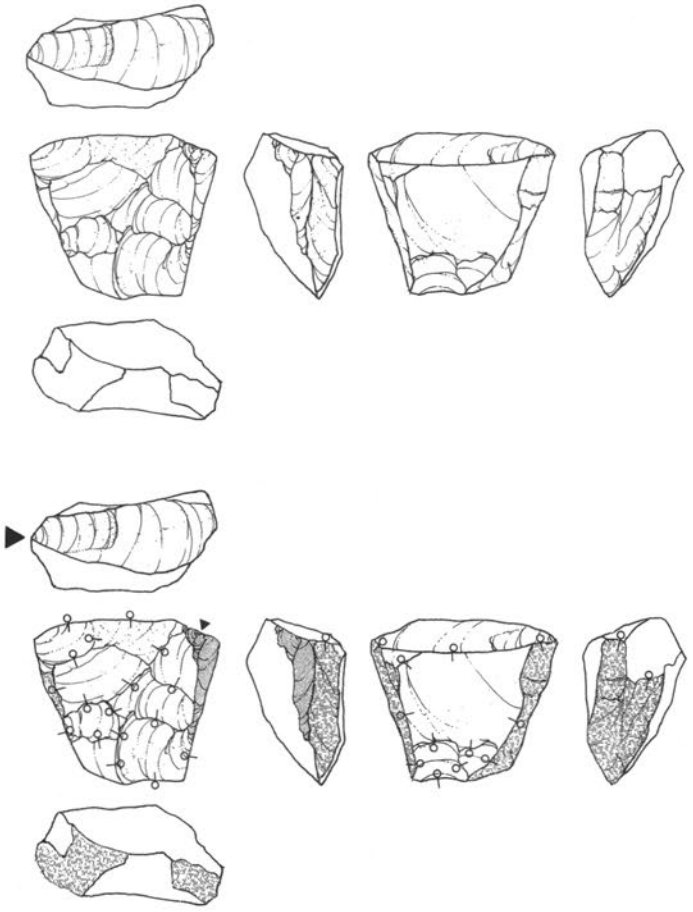




第１図　遺跡の位置と地形



第２図　向郷菩提遺跡旧石器時代遺物出土状況

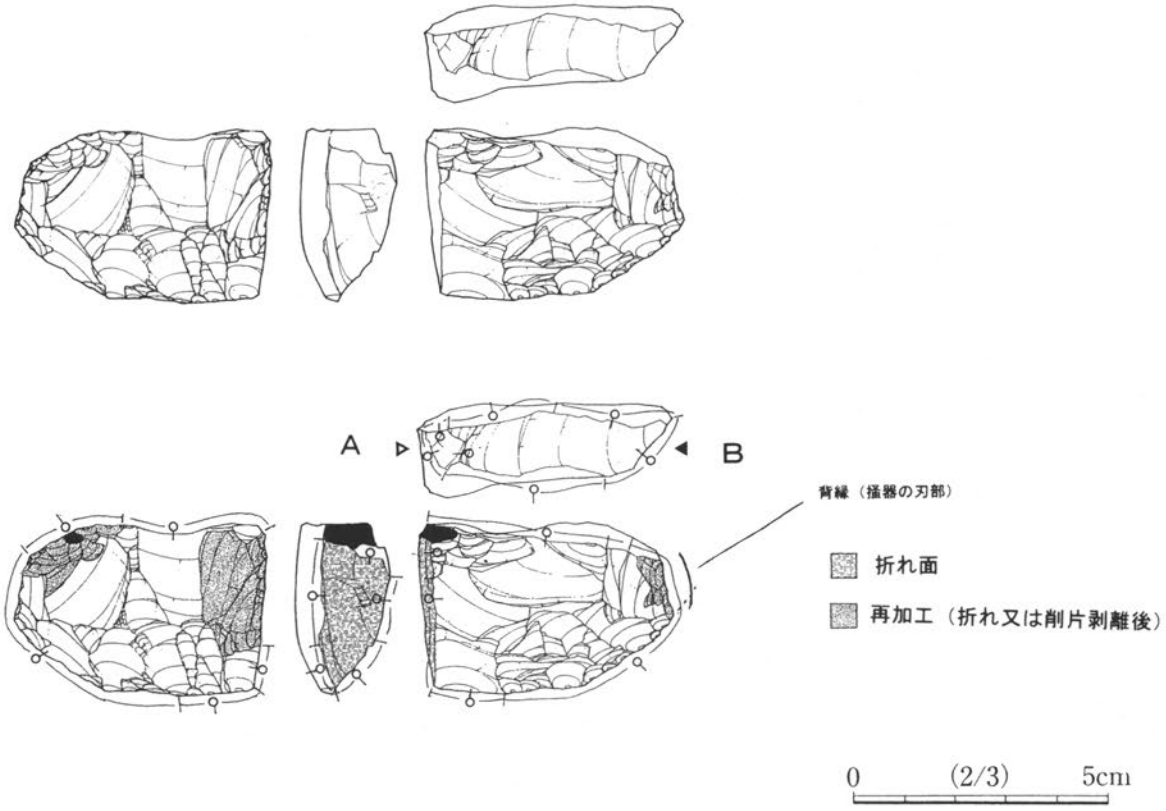


折れ面

最終剥離面

切り合い関係（丸印が新）

向郷菩提遺跡



東上泉遺跡

第３図　遺物実測図

(2011)

これらの場の性格については、石器群の内容から通常の遺跡と異なり「製作跡と言うよりも廃棄の場」、すなわち「不要品の捨て場」と位置づけられているが、妥当な見解と評価される。

出土遺物は計260点で，石器組成は「尖頭器を中心に細石核・石核・石斧・石錐・削器・礫器・楔形石器・船底形石器・二次加工石器・使用剥片・敲石・磨石・剥片」[1]，石材は，「房総半島の第四紀礫層（黒色緻密質安山岩・黒色頁岩・ホルンフェルス等），嶺岡山地（珪質頁岩・泥岩），高原山（黒曜石）に由来する」とされている。

報文のとおり全体的には旧石器時代末期の石器群といえよう。このうち尖頭器は20個体（うち19個体が未成品）出土しており、石材は付近の万田野・長浜層に産する円礫が素材として用いられている。未成品の多産と本ノ木型（２点）の出土が特徴的である。帰属時期は，報文のとおり落合・永塚編年の５期に対比される（落合・永塚2001）。

一方，肝心の細石刃石器群は，細石刃核３点，細石刃核原型１点，細石刃核作業面再生剥片１点及び細石刃１点の出土が報じられている。

対象とする資料は，報文で「安山岩製の削片系細石核」（報文：第44図23）とされたものであり、併せて「裏面に素材の主要剥離面を残し，扁平な形態を呈する。器体の大まかな整形を終えた後に打面を形成し，打面作出後の調整は少ない。打面の両端に作業面を持つ」等の観察所見が付されている。

以下、今回の再検討の結果を記す。

1）法量は，高さ3.0cm，幅1.9cm，長さ3.4cm，重さ25.5ｇ。打面の大きさは，幅1.5cm，長さ3.6cm 。

2）石材は（黒色緻密質）安山岩と報じられているが、風化度の高いホルンフェルスと認識される。

3）切り合い関係から復元される製作手順は以下のとおりである（第３図）。

・まず、大形剥片の両端を（意図的に？）折断する[2]。

・両端の折れ面から素材剥片の背面側に片面調整を施し，その途上で上下両端に断面三角形の稜を作出する。上縁部は不明だが、下縁部の刃角は約65°。

・折れ面の一端から打撃を加え削片を剥離している。打面は、横位にやや傾斜している（左右の側面と打面の傾斜角は95° と110°）。現状では単一の剥離面で構成されているが、むろんみかけであり、複数回の削片剥離が行われた可能性がある。

・最後に側面に部分的な調整を施している（長さ：2.0cm、幅：0.5cm）[3]。

再検討の結果、当該資料は両面調整素材を母型とした典型的な湧別技法とは，製作工程が、やや異なるものとは判断せざるを得ない。また細石刃生産の痕跡が明確ではないことも問題である。しかしながら，両面調整体をイメージしていることや，削片剥離による打面作出を重視し，削片系のコアブランクと考えたい。

（２）東上泉遺跡（第１図）

本遺跡は，下総台地の南縁部，南に小櫃川を望む標高約40ｍの袖ケ浦台地に位置する。

旧石器時代の遺物は，縄文～古墳時代の遺構覆土から出土した。したがって，原位置をとどめていない。

遺物の内容は，細石刃核原型，二次加工ある剥片，ナイフ形石器及び剥片がそれぞれ単独で出土している。そのうち，ここで取り上げる資料は，「細石刃石核原型」（コアブランク）である（報文：第７図１）。

今回の観察所見を以下に記す。

1）法量は，高さ3.4cm，幅1.9cm，長さ4.9cm，重さ39.3g。打面の大きさは，幅1.2cm，長さ3.6cm。

2）石材は硬質頁岩。表面には耕作等によるガジリ（黒彩）が観察される。

3）切り合い関係から求められる製作手順は以下のとおりである（第３図）。

・まず、両面調整体を素材として，長軸方向に削片を剥離し，打面を形成する（正面左方向「Ａ」から加撃）。

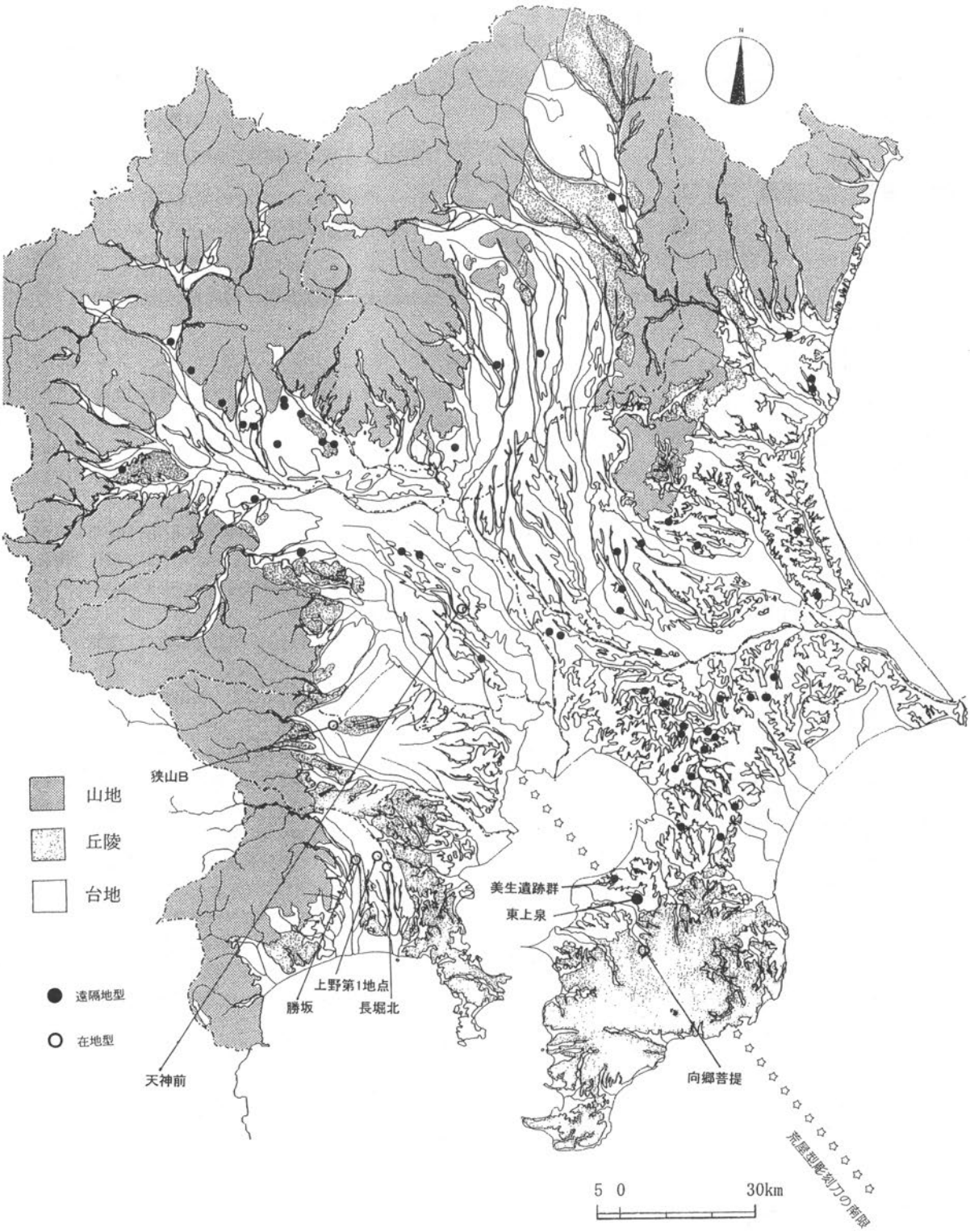
・その後，コアブランクの中央部付近に，意図的かは不明であるが，折断等により平坦面が形成された。

・次にこの平坦面から左側面に向けて長軸方向の側面調整が施されている。この再加工の目的は、新たな細石刃剥離に向けての稜形成にあると推定されるが、何らかの要因で中途で断念している。

なお、上端部右側の平坦面と右側面が接する稜に沿って小さな剥離痕が見られる。しかし、剥離面の末端は階段状剥離を呈している。どうやら、当初のもくろみとは異なり、スムーズな（細石刃？）剥離は叶わなかったようである。

・一方，打面には背縁からの打撃による削片剥離の痕跡が残されている。（正面右方向「Ｂ」から加撃）この削片剥離による打面の更新の後、背縁と左側面の打面付近の２か所に再加工が施されている。

このうち背縁は掻器の刃部となっており、最終的に細石刃核から掻器への転用が図られたことが



第４図　北方系細石刃石器群関連遺跡分布図（関東）

理解される。この部位は３枚の剥離面で構成され、刃角は約80°。縁辺にはツブレが見られ、その裏面は平坦で使用のためか光沢を帯びている。

以上のように、全体的に大きな欠損にもかかわらず，削片剥離や側面調整等の再加工を試み，最終的に本来の細石刃生産に替わって、掻器に転用されている。

すなわち良質な素材を徹底的に使い尽くそうとする、当時の製作者の強い思いを感じるのである。

３　資料の意義とその評価（第４図）

県内の北方系の研究は、石器文化研究交流会ちば実行委員会主催の「テーマ発表「古利根川以東の北方系細石刃石器群」（島立・永塚1997）や筆者の「関東細石器考」（橋本1998）の刊行から，十余年を経て，多くの関連資料が蓄積されてきた。

その結果、関東における関連遺跡は、図示したように、現在65遺跡（北関東29，南関東36）を数える。ちなみに，98年には27遺跡であった。この間の，主な調査成果として、県内では今回の２遺跡のほかにキサキ遺跡４地点（米倉2010）、東峰御幸畑西（宮ほか2000）等がある。

かつては遺跡分布の南限は村田川流域(草刈六之台)であったが，新たに，東上泉遺跡が追加され、遺跡分布が小櫃川流域まで南下することとなった[4)]。

また，同じ流域の向郷菩提遺跡では，付近の万田野・長浜層産と推定される円礫を用いた「在地型の削片系」が発見された。県内初の資料として貴重である。

当該資料と尖頭器石器群との共存関係は、ほぼ明確であり、関東の類例としては，埼玉県蓮田市天神前(田中1991)，東京都瑞穂町狭山Ｂ（内野・原川2003)，神奈川県大和市月見野上野遺跡群上野第１地点（相田・小池1986)，同長堀北（滝澤・小池1990・1991)，相模原市勝坂（青木・内川1993）がある。

翻って、両遺跡は小櫃川流域に立地し、直線で約12kmの距離を隔てている。いずれも削片系細石刃核の関連資料といえるが，その性格は好対照である。

すなわち、東上泉は純然たる北方系に属し，遠隔地型といえる。これに対して，向郷菩提は，石材に遠隔地の硬質頁岩ではなく，近傍に産するホルンフェルスを用い，技術的にも真正の湧別技法とは言い難い。

このように石器群の様相に違いはあるが，両者は関東（本州の太平洋側）では最南端に位置し，分布・立地論を語る上で意義深い資料といえよう。

また、東上泉の資料は，細石刃核から掻器への転用例、向郷菩提は在地石材を用いた削片系のコアブランクであり，先述のとおり共に周辺地域の特性を良く表している。

おわりに

今回は，時間的な制約のために，削片系細石刃核に関する基礎資料の検討に焦点を絞った。今後は微視的には、共存関係にある尖頭器石器群等、また、巨視的には県内はもとより関東全域の北方系との比較検討が不可欠であるが，この点については他日を期したい。

なお、本論を草するにあたって、以下の方々に協力いただきました。記して、深甚の謝意を表します。

池谷信之、高橋直樹、島立桂、山岡磨由子

注

1）敲石や磨石は縄文石器との区別が困難であるという。

2）子細な観察の結果、両端は細石刃の作業面ではなく横方向の打撃痕をもつ折断ないしは折れ面であることが判明した。

3）基本的には側面調整と考えるが細石刃剝離を意図した可能性を払拭できない。

4）東上泉の周辺では、すでに袖ケ浦市美生遺跡群第６地点（久保田川流域）も見いだされていたが，調整剥片が数点出土しているにすぎず、確実とは言い難い資料であった。

引用参考文献（年代順）

吉田格・肥留間博　1970　『狭山・六道山・浅間谷遺跡』東京都瑞穂町役場

相田薫・小池聡　1986『月見野上野遺跡群上野遺跡第１地点』大和市教育委員会

滝澤亮・小池聡　1990･1991『長堀北遺跡』大和市教育委員会

田中和之　1991『黒浜貝塚群天神前遺跡』蓮田市教育委員会

青木豊・内川隆志　1993　『勝坂遺跡第45次調査』相模原市市道磯部上出口改良事業地内遺跡調査団

浜崎雅仁　1994　『―千葉県袖ケ浦市―美生遺跡群第６・７地点』　財団法人君津郡市文化財センター

永塚俊司1998「細石刃核の変形―東峰御幸畑西（空港№61）遺跡の細石刃石器群より」『研究連絡誌』第52号　pp. 1－8

宮重行・麻生正信・永塚俊司　2000『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書13 ―東峰御幸畑西遺跡(空港№61遺跡)―』財団法人千葉県文化財センター

落合章雄・永塚俊司　2001「尖頭器石器群の編年」『千葉県文化財センター研究紀要』22　pp.40-47

内野正・原川雄二　2003『狭山遺跡』財団法人東京都埋蔵文化財センター

石川誠　2005『国道道路改築委託（久留里）埋蔵文化財調査報告書―君津市富田田面遺跡・向郷菩提遺跡―』　財団法人千葉県文化財センター

倉内郁子2007「東上泉遺跡」『主要地方道千葉鴨川線埋蔵文化財調査報告書５―袖ケ浦市東上泉遺跡・神野台遺跡―』財団法人千葉県教育振興財団

米倉貴之2010『キサキ遺跡４地点』財団法人印旛郡市文化財センター